



～母の日感動エピソード受賞作品 10 作品～

今年と同じ5月8日の母の日に、十数年前、次女が誕生しました。前日朝からの辛く長い陣痛に耐え、次女が無事に産まれたのは8日の未明の事でした。

私は、次女が無事に産まれた事への安堵感と、睡眠不足と体力消耗のせいか、いつの間にか眠りに落ちてしまいました。

昼前に目覚めた時、幼い長女がカーネーションの花束を持ち、可愛らしい笑顔で私の母と一緒にベッドのそばで座っていました。

私が目覚めた事に気づいた長女が、パアッと輝くような笑顔で『ママ、ありがとう。ばあちゃんとお花選んだの。』と嬉しそうに私にカーネーションの花束をプレゼントしてくれたのです。

私は、あまりのサプライズに嬉しすぎて言葉が出ませんでした。

そして、ふと我に返りました。

私が里帰り出産をし、孫の長女の面倒をみながら、私への花束のプレゼントを孫娘と考えてくれた母、私はそんな母へ、『お母さん、本当にありがとう。私からのプレゼントがなくてごめんね。』

と言葉にしたところ、『何言ってるの。こんなに可愛い2人めの孫娘。これ以上のプレゼントはないでしょ。ばあちゃん、ますます頑張らなくっちゃ。』と明るい笑顔で答えてくれた母。

そんな素敵な母へ、直接、母の日のプレゼントを贈ることができたのは、次女が誕生してからたったの3回だけでした。

今年も母の墓前へカーネーションを贈りたいと思っています。

それは、私が結婚を決め、式まであと1ヶ月くらいの時の話です。式に持っていく、何か綺麗なハンカチはないかな～と実家に立ちよった時、「使っていないハンカチ、沢山あるよ～」と母が出してくれました。その中に、古ぼけたような水玉のピンクの小さなハンカチがありました。「これだけ、古臭いなあ～」と話してたら、「それは、あなたが初めて母の日にくれたハンカチだよ。ずっと取っておいたけど、あなたにあげる」と。私の脳内で記憶が戻り、それは母の日に、家の近くのコンビニで300円で買った、小学生の頃の記憶でした。なんとかして、母を喜ばせたい、と思い勇気を持ってコンビニで買い物をしたのを思い出しました。私からの初めての母の日のプレゼントをずっと大事にしまっていた、**母の気持ちで、胸が熱くなりました。**子供だった私も大人になり結婚してしまうけど、いつまでも、母の子供でいて、これからもプレゼントをあげつづけようと、思う出来事でした。

「寝れる時に寝る！」これは母が里帰り出産で実家に帰ってきた私に何度も言ってくれた言葉です。令和2年の5月に息子が産まれました。息子は少し小さめに産まれたので母乳を吸うのが下手で、搾乳した母乳を哺乳瓶で飲んでいました。母乳はどんどん溢れてくるので、2.3時間に1回搾乳しないとパンパンに膨れ上がり痛みが出るほどでした。それは夜中も変わらないので、深夜でも椅子に座って搾乳していました。その時に母が息子を見てくれていました。搾乳中に起きたら搾乳してあった母乳を温め、あげてくれたり、抱っこしてあやしてくれました。慣れない搾乳のため、1回に30~40分ほどかかりました。それが終わった後も「寝れる時に寝る！今ちょっとでも寝ておいで！」と寝かせてくれました。自分は朝ごはんの準備、洗濯、掃除、ゴミ出しとやるのがいっぱいなのに。息子が寝るたびに「寝れる時に寝る！」を合言葉に私を休ませてくれました。そのおかげで私は産後のボロボロだった身体の回復も早く、寝不足などでイライラすることなく息子と触れ合えて本当に良かったです。

母は自分が寝不足なんて感じさせないで家族の面倒も見て、スーパーマンです。今は父の母の介護も家でしています。かれこれ何十年ゆっくり旅行に出かけるというのがないので、コロナも落ち着いたら両親揃って、孫も連れて旅行に行きたいと思います。自分で作らない料理を食べる母は「ご飯の準備も後片付けもしなくて良いなんて幸せ！」と言ってくれるはず。これから親孝行していっぱい喜ばせてあげたいです。

私は現在26歳。18で妊娠結婚出産。当時旦那は19。娘がうまれた。娘の誕生日のちょうど10日前、事故にあい旦那はそのまま亡くなった。わたしは19で未亡人になった。ショックはかなり大きく、これから先どうしたらいいのか？なかなか前に進めなかった。それからシングルマザーとなり育児、仕事を一生懸命頑張っている。当時19歳の私はまだまだ子供。お金など全くなし。支えてくれたのがお義母さん。そして自分の母。**2人の母。この母達がいなければ今の私はいないと思います。**シングルならば補助があり保育園に行けるがまだ1歳の娘を外に出すのは不安だったし、園に行くには道具を揃えるのに出費がある。それでさえお金に余裕はなかった。なので色々相談をし、母は働いていた時間を短くしたり、休みを多くとったりと協力をしてくれ、短い時間だが娘を交代で母にあずけ私は働いた。母に、「手に職。資格があった方がよい」と言われ、無資格だった私は無事に資格を取得。それから現在、その資格を生かし仕事をしています。かれこれ娘も小学2年生。成長し続けています！娘と2人で毎日ハッピーライフ！本当にここまでやってこれたのはお義母さん、自分の母のおかげです。感謝してもきれないほど。年に1回の母の日には私ながらに昔は小さいもの(価格がとても安い物)から現在ちょっとレベルアップしたものを送ってます！もちろん値段じゃなく、気持ちが大切だと思いますが…。毎年娘と、何をあげようか？一緒に考えながら決めていきます！今年のプレゼントは決まっておらず、まだまだ考え中です…！！

私は重度身体障がい者です。毎日毎日、私のために、母は生活してくれます。その母は古希を過ぎ、高齢者です。私が幼い頃から、心無き人たちからは、「大変だねー」、「歩けないの？かわいそうだね」、「いや～、大きな赤ちゃんのようだね！」、「障がい者？障がい者？お～、嫌だ！嫌だ！」などと嘲笑されてきました。その度に、**私が悲しまないよう、母が壁になってくれたのです。**いや、今でも、何かあると母が壁になってくれます。しかし、そんな母に、私は、世間でいう「親孝行」という言葉は、とんでもなく難しいことです。だからこそ、母の日と母の誕生日だけでも、**日頃の感謝を込めて、母が喜ぶ品をプレゼントしたい**と考えています。ただ、母に「何か欲しいものある？」と訊いても「何もない、介護がバリバリ出来る健康でパワー溢れる身体が欲しいかな(笑)」と言うだけです。だからこそ、特別な日には、パワーがつくように、美味しい品をたくさん買って、たくさん食べます。

これからも、母とたのしく、美味しい品をたくさん食せる日が重ねられますように…。

お母さん、いつもありがとう。

「ちょっとまってね、今行くからね。」母が声を掛けて向かう先は、私でも、父でも、ペットでもない。もはや人や動物ではない。**我が家で 10 年を超え現役活躍中の電子レンジだ。**「消火しました」と伝えるコンロやお湯が沸いたケトル達、ありとあらゆる家電に母は話しかけていた。「はーい」「ありがとう」「お疲れ様」話しかける内容は色々だった。

幼い頃の私は、反抗期も相まって、母の家電との会話を嫌がった。学校で嫌なことがあったり、友人が遊びに来たりしても変わらぬ調子の母は、ただただ能天気なお調子者に感じられた。

でも、自分自身が母になり、少し母の気持ちが分かった気がする。家事は孤独なのだ。家族の食事を忙しく作るなか、子どもはリビングで遊んでいたたり、夫はパソコンを開いて仕事をしていたりする。「ご飯だよ」と声を掛けるまでの間、台所で私はただひたすら一人だ。そんな料理を共に乗り越える家電は、間違えなく愛着の沸くパートナーなのだ。

私は自分を恥じた。幼少期はべったり母のエプロンの裾を掴んで離さない私だったが、成長してからはどうだっただろうか。料理する母の気持ちを少しでも想いやれていただけだろうか。「お疲れ様」と声を掛けられたかったのは母の方だったのではないだろうか。

スマートスピーカー搭載の家電と一緒に選んでもよいかもしれない。もしくは、母の好きな豆大福を沢山買って、もう遅いかもしれないけれど、たくさん母の話を聴くのも良いのかもしれない。まだ何をするのかは決められてないけれど、**今度の母の日は感謝に少し謝罪を込めて、母に会いたい。**

私は小さい頃からアラフォーの今も母が大好きです。私の家は自営業だったので、母は朝早くから夜遅くまで働いていました。そんな母に日頃のお礼をしたくて5歳の私は母にカップラーメンを作ってあげることにしました。ヤカンでお湯を沸かしカップに湯を注ぐときカップが倒れ、バシャーんと私の右太ももに熱湯がかかりました。熱くて大騒ぎしかったですが、家の隣にあるお店で働いている母に心配をかけたくなかったので声も出さずお風呂場に駆け込み履いていた靴下を脱ぎ水を染み込ませ火傷した部分を冷やしました。もう冷たくて冷やせないと思った頃母に報告しました。怒られると思っていた私は恐る恐る報告しました。母は私の意図がわかったのか、すぐに私を抱きしめ傷を確認し病院に連れていってくれました。私は驚いたとともに母の愛情を猛烈に感じました。私も母がしてくれたように大きな愛情で子どもを包んでいきたいです。そして母に対しても同じような思いで接していこうと思います。

GW前半、4年ぶりに青森の実家に子ども達を連れて帰省する事が出来ました。(丸3年コロナで全く帰省出来ていませんでしたから)

母は、もともと花が大好きで実家の庭も花や木でいつもいっぱいなんです、今回帰省してバラのアーチが出来ている事に驚きました！

「もしや??」と思って母に聞くとやはり…

4年前の母の日に送ったバラを大切に大切に育て増やしていたとの事。

コロナで孫達にも会えず寂しかったけど、母の日にもらったバラが花を咲かせ、どんどん成長するのが楽しみだった。みんなが帰省して驚く顔が見たかったと、とても嬉しそうに話してくれました。

子ども達も4年前にバラをばあばに送ったのを覚えていたので、あの時のバラがこんなに大きくなっていると驚くとともに、命の大切さを感じるとてもステキな経験が出来ました。

バラを母の日に送った時の私は、「母は花が好きだし綺麗だから。」となんとなく選んだのですが、母はこの4年間本当に大切に育ててくれたんだなあと思うとありがたかったです。

「今度の母の日、お母さんに何かプレゼントしようよ！」 そう言い出したのは姉だった。

私は当時小学 2 年生。3 歳年上の姉の提案は子どもながらに、とても魅力的で心躍るものに思えた。

母に内緒で姉妹二人、どんなプレゼントが良いかを話し合い、僅かなお小遣いを貯めてきた貯金箱から硬貨を取り出し、近くの雑貨屋で薄いピンク色のハンカチを買った。

子どもだった私たちは、プレゼント用の包装をしてもらう発想もなく、それは、値札がついたままの剥き出しのハンカチだった。

それでも、姉と協力して二人で買ったそのハンカチは、私の目には何か特別なもののように映った。

母の日当日、ワクワクしながら二人で母にハンカチを渡すと、母の反応は思ってもみなかったものだった。

「何のために小遣い渡してると思ってるの！？こんなものを買うお金があるなら、貯金しなさい！」

母の恐ろしい形相と怒声だけが、私の胸に強烈に刻まれた。

あれから 54 年。母は 88 歳になった。私は今、実家で年老いた父母の介護をしている。

昨年の母の日、私は何でも無いふうを装って母にストールをプレゼントした。淡い緑色の春らしいストール。それを受けとった母は、にこやかに微笑みながらこう言った。

「あらまあ、ありがとう。いい色じゃない」

母は認知症だ。同じ話ばかり繰り返し、今自分が何をしていたかも忘れ、テレビの内容はほとんど理解できない。でも、だからこそ、母の素直な「ありがとう」の言葉が、私の胸に迫るのだ。心の奥底でざらついていたあの日の記憶が、晴れてゆく。

私自身も歳を重ね、今になって分かることがある。私が子どもの頃、我が家には少なくない借金があり、父母は町の商店街の小さな精肉店で、朝早くから晩まで働いていた。

小学生の姉妹二人に不自由な思いはさせまいと、毎日とにかく必死だったのだろう。

あの日の母はきっと、こう言いたかったに違いない。親のためにお金を使うな、自分のために使いなさい、自分たちの幸せを考えなさい、と。

「ありがとう」と無邪気に笑う母を前に、私は思う。

昔も今も願うのは、母の喜ぶ顔。それだけだ。

私はお母さんに たくさんの肌着、下着を贈ります。

母は、私が中学生、弟が小学生の時から女手ひとつで育ててくれました。

詳しい事情は私にはわかりませんでした、生活は苦しいものでした。

食べることだけは不自由なく過ごせましたが、生理用品も買えず、給食費も払えないこともありました。

セーラー服の下に着るセーターもなく、とても寒かった。コートもなかった。下着や靴下も洗い替えがなく、濡れたまま着て行ったことも。辛かったです。

当時、母は頑張って働いてくれていましたが女手ひとつというのは、厳しいものです。

そんな生活を恨んだこともありましたが、三人で何とか乗り切りました。

私と弟も成長し、結婚し、弟に子供が生まれ、母はとてうれしそうでした。

何年かしたある秋の日、母は弟の子供に、たくさんの冬用の服や下着を買ってきました。

私が「なあに？そんなにたくさん。まだ冬には早いよ。」と言ったら、

母が「子供には寒い思いをさせたらいけない、メグミとカツヒロには何も買ってあげられなかった…かわいそうだった…」と、言ったのです。

私は、はっと、しました。ぐぐっと、何かが込み上げてきました。

そして、私は流れた涙を見られたくなくて部屋から出てしまいました。

あの頃、私より、お母さんのほうが、ずっと、ずっと、辛かったのです。どんなに苦しかったでしょうか。

思えば、母の服は叔母のお下がり、下着や靴下でさえそうでした。

仕事先で着替える時、下着がぼろぼろだから、恥ずかしいと言っていたことも…。

お母さん、下着なんて買えなかったよね。

食べることだけで精一杯で。下着を買うなんて贅沢なことだったよね。

寒かったね。辛かったね。あの頃は、何もしてあげられなくてごめんね。

…今、そんな思いで、これから母の日には、

最高の、着心地のいい、あったかい、下着を贈りたいと思っています。